潜在連合テスト(IAT)による隠匿情報検査(CIT)の試み(3)

—ひとつの裁決項目と複数の非裁決項目による検討—

○水師葉月・古満伊里
(○広島修道大学大学院人文科学研究科・広島修道大学健康科学部)

目的

日本の犯罪捜査機関が使用する隠匿情報検査（Concealed Information Test; CIT）は，心拍数，呼吸数などの生理反応を指標としている。しかしこの検査の施行には時間を要し，一度に複数人の測定も困難である。近年，より簡便な方法で犯罪関与者を検出する方法が検討されている。本研究では潜在連合テスト（Implicit Association Test; IAT）に注目した。IAT は反応時間を指標とし，対象概念（例えば，花と虫）と属性概念（例えば，ポジティブ語とネガティブ語）の連合強度を，それぞれの概念に属している刺激の分類に要する時間によって測定する。

水師・古満（2019，日本心理学会第 83 回大会）では，裁決項目と非裁決項目 1 項目ずつを刺激とした IAT を作成し，Dscore の値を検出の基準とした。その結果，ヒット 6 名，ミス 8 名，誤警報 2 名，正棄却 14 名となり，検出率は 66.7%であった。実務では 1 つの裁決項目に対して非裁決項目を 5 項目程度用意するが，本研究では裁決項目 1 項目と非裁決項目 2 項目で検出率を検討した。

方法

実験参加者：30 名の学生を被検者とし，模擬窃盗課題を行う有罪群（15 名）とフィラー課題を行う無罪群（15 名）とに振り分けた。

模擬窃盗課題：「ある部屋に侵入し，金目の物を盗む」ように指示した。盗品を『裁決項目』とし，品目は「指輪」「腕時計」「イヤリング」のいずれかであり，被検者間でカウンターバランスした。

IAT：検査では，対象概念として『裁決項目』と『非裁決項目（盗品以外の 2 品目）』の刺激画像，及び属性概念として『盗んだ』『盗んでいない』という概念に関連する刺激語をパソコン画面上に呈示した。『盗んだ』に対する刺激語は「窃盗」「盗品」「窃取」「泥棒」「有罪」，『盗んでいない』に対する刺激語は「潔白」「無実」「無根」「無罪」「冤罪」であった。『裁決項目』－『盗んだ』の組み合わせが一致条件，『裁決項目』－『盗んでいない』の組み合わせが不一致条件であり，各条件における刺激分類に要する反応時間を測定した。

結果

『裁決項目』と『非裁決項目』を組み合わせた 2 つの IAT における一致条件と不一致条件の平均反応時間を算出した。平均反応時間を従属変数として群（有罪・無罪）×条件（一致・不一致）の 2 要因混合分散分析を行った結果，群，条件及び交互作用のいずれにも有意差は見られなかった。

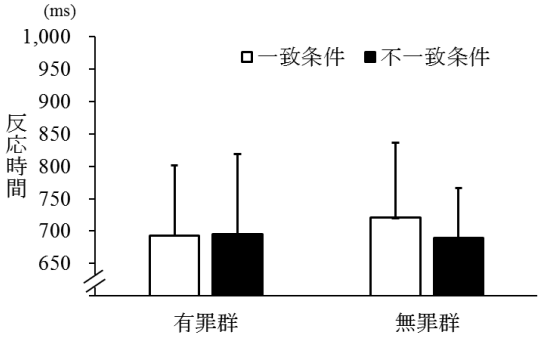

Figure 1. 有罪群,無罪群の平均反応時間

犯罪関与者の判定基準を次の 4 段階で定めた。①Dscore の値が 0 以下であれば有罪，②Dscore の絶対値が 0.0 以下であれば無罪，③Dscore の絶対値が 0.5 以上であれば有罪，④IAT における誤答率が 5%以上であれば有罪である。その結果，ヒット 11 名，ミス 4 名，誤警報 5 名，正棄却 10 名となり，検出率は 70%であった。

考察

有罪群においては不一致条件よりも一致条件の反応時間が速くなることを予測したが，条件間に有意差はなかった。これは，一致条件における『裁決項目』と『盗んだ』という概念の記憶連合が不十分であったか，連合は形成されているもののその活性が不十分であったためと考えられる。その理由としては，模擬窃盗課題の遂行から検査までの時間が短いことから記憶の定着が不十分であったことが考えられる。また，隠匿への動機づけが低いことも考えられる。複数の品目から裁決項目を被検者が選択することで動機づけを高めることができるのではなかろうか。本研究では，IAT による犯罪関与者の検出可能性が示唆された。今後は，複数の裁決項目を導入することにより，実務の CIT に近づけるとともに，IAT－CIT による検出基準を詳細に定める必要がある。